みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Ryukyuan Dialects as Endangered Languages in Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狩俣, 繁久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001920

崎山理編『消滅の危機に瀕した言語の研究の現状と課題』
国立民族学博物館調査報告　39:257-267（2003）

危機言語としての琉球方言の研究状況
日本復帰後から今日までの活動についてのおぼえがき

狩俣　繁久

1　はじめに
2　琉球方言研究の転機
3　沖縄方言研究センターの設立
3.1　琉球列島の言語の研究
3.2　那覇市方言の記録・保存
3.3　琉球列島の音声の収集と研究
3.4　琉球語音声データベース
4　法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』
5　南島文化研究所
6　環太平洋の消滅に瀕した言語の緊急調査研究
7　これからの琉球方言研究

1　はじめに

1972年５月15日に沖縄が米軍統治から解放され，日本に復帰してから今年で30年になる。その30年間の沖縄における危機言語としての琉球方言の研究状況について概観したいとおもう。これまでの琉球方言研究，そして，いまの琉球方言研究を概観することによって，これからの琉球方言研究を考える材料をすこしばかり提供できたらとかんがえるからである。

消滅の危機に瀕する言語あるいは方言の記録・保存を主とする仕事と，そうでない，ある学問上の目的のためにする研究とを厳密に区別するのは容易ではない。後者の研究も間接的には，ある言語（方言）の記録・保存につながるものである。しかし，ここでは組織や集団による記録・保存を中心にした研究，あるいは個人の仕事ではあっても長期的，かつ記録・保存に関わる研究を中心に述べることにする。

2　琉球方言研究の転機

復帰から３年たった1975年３月に琉球大学で23年間教鞭をとり，琉球方言研究を続けながら，多くの研究者を育てた仲宗根政善教授が退官された。現在，琉球大学の定年は65歳であるが，1972年に琉球政府立から日本の国立に移管し，復帰にともなう特別措置によって２年延長され，仲宗根は67歳での定年であった。仲宗根は，後任を国立国語研究所に勤めていた上村幸雄に打診し，招請の手紙をかかれた[1]。しかし，1974年から招聘教授としてドイツに滞在していた上村幸雄は仲宗根政善の退官後すぐに琉球大学に赴

任できず，着任されたのは1976年４月である。その間の琉球大学での講義は，国語学概論を加治工真市（当時・沖縄工業高校教諭，現・沖縄県立芸術大学教授）が非常勤講師として担当し，方言学概論を仲宗根が非常勤講師として担当した。

この交替は仲宗根の期待どおりに琉球方言研究の大きな飛躍の契機となった。仲宗根は，琉球大学での研究・教育だけでなく，研究者の養成，研究組織の運営など，あらゆることを上村にゆだねられ，自らはライフワークであった今帰仁方言の研究に専念される[2)]。そして，1983年に『沖縄今帰仁方言辞典』を出版された。

3　沖縄言語研究センターの設立

その上村の琉球大学着任から２年後の1978年，沖縄言語研究センターが設立された。それ以前から琉球大学の学生のサークルとして「琉球方言研究クラブ」が1957年に設立され活動を続けていたし，その卒業生が個々に方言の調査を少しずつおこなっていたが，1978年以前には沖縄言語研究センターのような研究組織や研究会のようなものはまだ存在しなかった。屋比久浩（2002）はつぎのようにかいている。

> 服部（四郎），仲宗根両教授が種を蒔き水をやり，手塩にかけて育てあげた「方言クラブ」を更に一段上のプロ集団に仕立てていったのが，現（沖縄言語研究）センター代表の上村幸雄教授である。（括弧内は筆者による補い）

屋比久がいうように，沖縄言語研究センターの設立には仲宗根がそだてた琉球大学の琉球方言研究クラブの卒業生たちの存在は欠かせないものであった。上村が着任２年目に沖縄言語研究センターをたちあげるための基盤がすでにできていたのある。

まず，沖縄言語研究センターの仕事を中心に概観するが，それは沖縄言語研究センターが日本復帰後の沖縄における琉球方言研究の中心であり，危機言語としての琉球方言の記録・保存のための多くの仕事をしてきたからである。すこしながくなるが，設立当初のころかかれた文章を引用する。センター設立の経緯がわかるし，その後の沖縄言語研究センターの仕事のあらましもわかる。

> 琉球方言が滅亡にむかいつつあることは否定しえない事実であり，わかい世代の方言はおおはばに変容し，くずれており，その機能をちいさくしている。わたしたちが，いきた言語としての琉球方言を有効に研究できる期間はごくかぎられている。島じまの，部落部落の伝統的な語彙，発音，文法，敬語法その他の各種の表現法は，現在70才前後もしくはそれ以上の高齢者のかたがたによってのみかろうじてほぼ正確に保存されているといってよい。これ

らのものが全面的にうしなわれる日はそうとおくない。わたしたちが研究と記録をいそがなければならない理由はここにある。考古学的な資料は，土地が開発をまぬがれれば，地中に保存されて将来にゆだねることができる。しかし，方言学的資料は，これを正確に記録にとどめないかぎり，すべてがうしなわれるのである。いまは有効に調査できる最後の時期である。したがってわたしたちは個人ではとうていなしえないこのしごとのためにおおきな研究組織をつくった。そして研究予算の裏づけのないままにしごとをはじめることを決意した。とりあえず仕事をはじめることがなにより必要だからである[3)]。

この文章は1979年，「危機言語」ということばさえ存在しなかった23年も前にかかれている。琉球方言が存続の危機に瀕していること，その琉球方言の研究だけでなく，記録･保存をおこなうべきこと，そして，なによりその仕事をいそいで実行にうつすべきであり，そして，沖縄県や文部省など公の機関からの予算的裏づけを待たずに仕事をはじめたことがわかる。何という見とおしだろうか。そして，何という決断だろうか。その趣旨に多くの人が賛同し，沖縄言語研究センターの仕事が始まった。私自身この文章にあおられるように，ときどきはふるいたたされて仕事をしてきたのである。

3.1　琉球列島の言語の研究

まず，沖縄言語研究センターは1980年「琉球列島の言語の研究」という言語地理学的な調査を開始した。当初は200内外の地点で基礎語彙を中心にした重要な単語をだいたい1000語ないし2000語の調査をおこなう計画であった。これに関しては，第１調査票から第４調査票まで作成され，それにもとづいて調査がおこなわれている。この調査票による調査を「基本調査」とよんでいる。調査票ごとに調査された地点のバラつきがあるが，大体100地点内外は調査されている。第１調査票は200地点近い地点の調査がなされているし，第４調査票は大体70地点ぐらいは調査してあるのではないかとおもう。

第１調査票は人体，動物，植物に関する基礎語彙を289項目，第２調査票は道具，自然，数詞など345項目，第３調査票は親族，人間関係，代名詞など227項目，第４調査票は形容詞，擬声擬態語231項目で，総計1092項目が調査できるように作成されている[4)]。

沖縄言語研究センターの活動は，最初は上村（沖縄言語研究センター研究運営委員長）や屋比久（研究副委員長），名嘉順一，津波古敏子，高橋俊三などの中心的なメンバーがそれぞれ経費を出し合って，調査票を作成したり，調査に出向いたりしている。また，この計画に参加する会員が自らの故郷の調査を帰省の折に調査したり，文字どおり自腹手弁当で調査をすすめていた。

基本調査をすすめていたところ，1982年に名護市教育委員会の要請によって名護市史の言語編のための調査がはじまる。そして名護市とその周辺，すなわち沖縄本島北部全域のすべての集落を調査することになった。そのために作成されたのが『名護･山原集

落調査票』である。この調査が発展して「全集落調査」がはじまる。すなわち，琉球列島のすべての伝統的な集落，約900地点について，200項目（一つの項目が二つとか三つとかに分かれているものがあるので，だいたい350項目の語彙，あるいは動詞や形容詞の活用形をふくむ）の調査がはじまったことになる。

沖縄言語研究センターがわずかな資金と手弁当で調査をすすめていくうちに，次第に計画の趣旨が理解されるようになり，1984年度から1989年度まで沖縄県教育委員会の委託事業として久米島，宮古，沖縄本島南部の全集落調査と，沖縄県全市町村から１地点，主な離島を含む67地点の全集落調査が実施された。琉球列島のうち鹿児島県に属する奄美諸島の全集落調査は文部省科学研究費をえることによって実施された。那覇市教育委員会からも委託事業として那覇市の各字の調査をおこなうなど，順調に調査ができるようになる。沖縄言語研究センターの仕事の大部分がこの調査に費やされ，ほぼ12年間かかって終了した。この調査によって琉球列島全体の，すべての集落のひじょうに大まかな様子がわかるようになってきたのである。そして，琉球列島の伝統的なすべての集落について200語が記録されたことになる。

現在，パソコンを利用して言語地図を作成しはじめている。とくにいまは，名護市史編纂の一環としての言語編の刊行にむけて沖縄本島北部地域の言語地図の作成が中心となっている。琉球列島全体の言語地図作成には克服しなければならない問題がたくさんあるが，いずれ解決されることだとおもわれる。

いろいろな所で「調査はしたのに，その後どうなっているのか」というような質問をうける。言語地理学的調査の結果の整理に手間や時間をかけず放置していたためである。しかし，その間，琉球方言の記録･保存のためのいろいろな仕事（後述）を始めたので，それはそれでよかったかな，というふうにもおもっている。また，調査した当時からはおもいもよらないほどIT技術が進歩し，高性能の機械やソフトが安価で手にはいるようになり，独自の研究費のない沖縄言語研究センターでもそれをつかえるようになってきた。

3.2 那覇市方言の記録･保存

1988年度から1993年度までの５年間，那覇市教育委員会の委託事業「那覇市方言の記録･保存事業」がおこなわれた。当初は「琉球列島の言語の研究」のための言語地理学的な調査だけをやるというような内容だったのだけれども，研究代表者の上村幸雄の提案によって那覇方言のさまざまなテキスト，すなわち，ことわざや，まじない，あるいは方言ニュースや沖縄芝居の脚本を文字化するというような仕事をはじめた。『沖縄語辞典』の改定増補の仕事や那覇民俗語彙の収集もおこなわれた[5]。

収録した那覇方言によることわざは，563編で，音韻記号によるテキスト，ルビを

ふった漢字かなまじりのテキスト，現代日本語訳，解釈，語注などを付したものである。漢字かなテキストは一般の利用をも考慮したものである。この仕事には那覇市文化財保護委員の崎間麗進氏（大正12年生まれ）が話者として，あるいはさまざまな情報提供者として協力してくださった。このテキストもDATで録音した。同様に，さまざまなばあいにおこなう祈願やまじないのことば，那覇の町を売り歩いた物売りの掛け声，童謡も採集した。テキストの作成，録音もおこなっている[6]。録音や資料作成，テキスト作成には当時，琉球大学の学部学生だった外間美奈子さん，仲村優子さん，前城淳子さん，山田尚子さんらがあたった。

方言ニュースとは，地元沖縄の放送局であるラジオ沖縄社が1960年から現在まで足かけ42年間，月曜日から金曜日までの週５日１日１回５分間だけおこなわれる首里方言と那覇方言によるニュース番組である。そのうち，1985年から1987年までの２年間に放送された542回分の番組のテープの提供をうけ，すべてにタイトル，放送年月日，キャスター名をつけた一覧表を作成し，長期保存のためすべての録音テープをDATに移録した。また，そのうちの11回分のテキストを作成した。音声記号，漢字かな，現代日本語訳の三つのテキストを対照できるようにし，かつ，語注を付した。

沖縄芝居とは，明治15年ごろから今日まで120年近く続いている沖縄方言による台詞劇をいう。沖縄の歴史に取材して創作された史劇，男女の愛を曲にのせて台詞を唱える歌劇，人間の生き様を風刺した喜劇などのジャンルがあって，数多くの作品があった。しかし，戦後は映画やテレビなどの娯楽に追われて観客が減り，たくさんあった劇団が次々に解散して，いまでは「母の日」や「敬老の日」など年数回の公演をおこなうにすぎないほど衰退している。脚本をもたない，口立てというやりかたが主であったために，脚本がほとんど残っていなかったが，那覇市の仕事がはじまったのを機に，沖縄芝居の代表的な俳優の真喜志康忠氏との共同作業で71本の芝居の脚本をテキスト化した。音韻記号，カタカナ，漢字かな，現代日本語訳の四つのテキストからなり，全部で3200ページにおよぶ長大なものである[7]。いま，地元出版社から全10巻の脚本集にまとめ，今年の秋から３年くらいで完結させる計画をすすめている。

3.3　琉球列島の音声の収集と研究

那覇市の仕事とほぼ重なるように，1990年から1993年まで文部省科学研究費重点領域研究『日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究』（総括班代表者杉藤美代子）の仕事もはじまった。そのなかで上村幸雄を代表者に琉球列島班が組織され，琉球方言の記録･保存事業のうち，それまでできなかった那覇市方言以外の方言の記録保存の仕事がはじまった。日本全体で共通におこなう「全国共通項目」とか「大都市調査」という仕事のほかに，琉球列島班独自の活動として『沖縄今帰仁方言辞

典』や『奄美方言分類辞典』といった，その頃すでに出版されていた辞典の全項目と用例を録音して，保存するという仕事である。

『沖縄今帰仁方言辞典』の録音は，重点領域研究が始まる１年前に沖縄言語研究センター自前の仕事として開始していたが，重点領域研究が始まってからは録音のための費用（消耗品費など）を重点領域の研究費をあててておこなわれた。辞典の著者の仲宗根政善が体調をくずされていたので，仲宗根と同じ今帰仁村与那嶺の出身で，小学校の同級生であった仲里源盛氏と山内光子さんの二人が話者になり，沖縄言語研究センターの島袋幸子が録音機の操作，その他の作業をおこない，まる３年（足掛け４年）を要して終了した[8]。

『奄美方言分類辞典』は，著者の長田須磨さんが自分の声を自ら録音した。これには共著者の須山名保子さんが協力者として加わり，録音のチェックその他の作業をおこなった[9]。長田須磨さんは『奄美方言分類辞典』の録音の余勢をかって，大和浜方言による民話と個人的な思い出話を録音された。それは『長田須磨の奄美の民話と昔がたり――奄美大島大和浜方言の記録』(1990)，『長田須磨の奄美の民話と昔がたり――奄美大島大和浜方言の記録，その２』(1993) として刊行されている。前者には65話，後者には10章74節の音声テキストと現代日本語訳が収録されている。

その仕事の一環として，まだ本としては出版されていなかった，石垣島出身の宮城信勇氏の『八重山石垣方言辞典（仮称)』の録音作業もおこなわれた。まだ活字になっていない１万５千枚余のカードのままの原稿を宮城信勇氏が読み上げ，加治工真市教授が沖縄県立芸術大学の研究室で録音をとった[10]。いま，『八重山石垣方言辞典（仮称)』の出版にむけた作業がすすめられている。

那覇市の仕事でも重点領域研究の仕事でないものとしてこの時期におこなわれた作業に『いふぁくとぅば――沖縄県石川市伊波方言集』(1993) の編集と録音がある。これは石川市伊波出身の伊波信光氏が書きためた伊波方言3700語の語彙集の原稿をワープロに入力して整理し，すべての項目を録音にとって，その編集した録音テープとともに公開したものである。これは原著者伊波信光氏と沖縄言語研究センター，そして石川市教育委員会の協力で成し遂げられたものである。

方言の記録・保存は文字に残すだけでいいのだろうかとおもっていたが，沖縄言語研究センターは，上村幸雄の提案によって本格的な辞書に記載された大量の項目と用例をDAT テープに録音するということをおこなった。方言が消えてしまわないうちに，いい話者が元気でいらっしゃるうちに，できるだけ良質の録音をとっておこうというものである。この方法は話者が減少し，消滅の危機に瀕した言語の記録・保存の方法として，あるいは，それを継承のために利用するうえでも最良の方法であった。

3.4　琉球語音声データベース

いろいろな仕事をしていたら，琉球大学附属図書館のほうから沖縄言語研究センターで収集した資料を図書館で予算をとるので公開しないかという誘いがあった。「琉球語音声データベース」という研究課題で当時の文部省に申請したところ，データベース科研で研究費をもらうことができた。これは「今帰仁方言音声データベース」と「首里那覇方言音声データベース」の二つからなるものである。

「今帰仁方言音声データベース」は，重点領域研究で録音した『沖縄今帰仁方言辞典』の音声をデジタル化し，あわせて『沖縄今帰仁方言辞典』そのものの文字情報をリンクして琉球大学附属図書館のホームページを介してインターネットで公開するというものである。「首里那覇方言音声データベース」は，「那覇市方言記録保存事業」で検討された『新沖縄語辞典』の文字情報と録音した音声をリンクして公開するものである。『新沖縄語辞典（仮称)』は，国立国語研究所『沖縄語辞典』をもとに，首里方言と那覇方言の語彙を増補し，例文を増やし，ローマ字表記だけだったものにカタカナによる表記を加える作業をおこなったものである。首里方言に関しても，現在の話者によるすべての語彙，例文の検討をおこなっている。首里出身の久手堅憲夫氏や仲里政子さんの音声を録音しているし，那覇方言話者の崎間麗進さんの音声も録音した。

「琉球語音声データベース」の特徴は，だれでも，いつでも，どこからでも，インターネット上の画面で辞典の項目の文字を見ながらその音声を同時に聞くことができる，ということである。2001年５月に「今帰仁方言音声データベース」と「首里那覇方言音声データベース」のふたつが全面的に公開され運用されている。

4　法政大学沖縄文化研究所『琉球の方言』

法政大学の沖縄文化研究所は，沖縄が復帰した1972年に「沖縄を中心とする南島文化と言語の総合的研究」のために設立された。設立の当初から琉球方言の研究は主要な課題としてかかげられていた。そして，1975年以来定期的に発行する研究報告書『琉球の方言』を刊行している。

> 日本語の一分枝として存在している琉球方言は，いま，試練の時期に直面している。すなわち，交通機関の発達によって島嶼という条件は克服されつつあり，また，マスコミの発達によって琉球方言の特異性も失われつつある。これは工業化・情報化社会における必然的な趨勢とはいえ，大いなる文化遺産の消失を意味するものであり，文化的に貴重な資料が失われることになる。
>
> このような状況にあって，法政大学沖縄文化研究所では，琉球方言の実態をできるだけ広

範囲にわたって収集し，少しでも多くの言語資料を後世に残していくことを責務の一つと考えるものである[11]。

1975年の『琉球の方言』では八重山石垣島川平方言の自然談話，語彙，文法（動詞，形容詞，助動詞，代名詞，助詞）についての共同調査の成果を報告している。それ以降，奄美大島宇検村湯湾，宮古大神島，奄美喜界島志戸桶，奄美徳之島井之川，久米島鳥島，奄美沖永良部島の方言の調査報告が７号まで刊行されている。調査には委託研究員の中本正智，内間直仁，加治工真市，野原三義，名嘉真三成らがあたっていた。いずれも沖縄出身の研究者である。調査の費用は個々の研究者の自前でまかなわれていた。その点も特筆すべきことであろう。８号以降からは共同調査の報告というかたちではなく，個々の研究者の調査報告や論説が掲載されるようになってゆくが，いずれにしても，琉球方言の貴重な資料が多数報告されているし，多くの若い研究者が加わっていて，今後も続いていくことであろう。

5　南島文化研究所

1978年４月に沖縄国際大学の南島文化研究所も南島沖縄の社会と文化を学際的に研究する機関として開設されている。「特定地域の調査研究」と「沖縄復帰の総合的研究」を２本の柱に活動がはじまった。そして，「与論・国頭」地域がその特定地域にえらばれ，社会，経済，歴史，地理，先史文化，言語，民謡などの分野での調査がおこなわれた。その調査報告書「地域研究シリーズ１　与論・国頭調査報告書」が1980年に刊行され，野原三義・高橋俊三「与論島の方言」が掲載されている。以降，2001年の22号までの報告書に，琉球方言に関しては南島文化研究所の所員の野原三義と高橋俊三が中心に南島各地域の方言の調査報告を発表している。詳細は各報告書に譲ることにして，ここでは調査地点と報告書の刊行年をあげるにとどめる。

沖永良部島（高橋・野原，1981），波照間島（野原，1982），伊良部島（野原，1983），徳之島（野原，1985），徳之島（高橋，1985），徳之島（野原・宮城，1986），加計呂間島（野原・宮城，1988），瀬戸内町（野原，1989），瀬戸内町（高橋，1990），来間島（野原，1990），来間島（野原，1991），下地町（野原，1992），多良間（高橋，1993），多良間（高橋，1994），多良間（高橋，1995），平良市狩俣（野原，1996），平良市狩俣（野原，1997），竹富町小浜（野原，1999），竹富町黒島（野原，2001）。

また，杉本信夫や上原孝三による口承文芸（歌謡）のテキストも掲載されている。

地元沖縄の研究機関がこのように継続して調査研究を続けていくことは大変重要なことである。

6　環太平洋の消滅に瀕した言語の緊急調査研究

1999年から2002年の研究期間で文部科学省の科学研究費特定領域研究「環太平洋の消滅に瀕した言語の緊急調査研究」の一環として琉球語（琉球方言）の緊急調査研究がはじまった。沖縄からは三つの計画研究と一つの公募研究がみとめられ，奄美班，沖縄班，八重山班，与論班の四つの班ごとに調査研究がおこなわれている。3年間でさまざまな仕事をおこなっているが，琉球班（上記の四つの班）は個別に調査をおこなうほかに，部分的には共同で調査研究をおこなっている[12)]。

7　これからの琉球方言研究

沖縄言語研究センターの仕事というのは，個人ではできない仕事を組織としておこなうという性格をもっている。沖縄言語研究センターが単なる学会組織，あるいは研究会のようなものではなく，集団で調査･研究をおこなう組織であった。そういう組織をつくったということが重要であった。言語地理学的な調査はそのような集団でおこなうものであった。あるいは誰かが一人でしている仕事を助ける，といったようなことも沖縄言語研究センターの仕事であった。それは人的に人を助けるという労力の問題と，もう一つは予算をどこかからとってきてそれを利用する，あるいは研究者の立場から専門的な，理論的な観点からたすけるというようなことをしながら仕事をすすめてきたということであった。それは，消滅の危機に瀕する琉球方言を緊急に調査研究するうえで適切な方法だったとおもう。

沖縄言語研究センターが発足して「琉球列島の言語の研究」をはじめたとき，方言調査ができるのは，10年内外が勝負ではないかといわれた。たしかに，伝統的な方言の変容と衰退はだれの目にもあきらかである。しかし，首里，那覇，あるいは今帰仁，石垣，奄美大島大和浜の方言ようにたくさんのデータがある方言と，貴重な方言であるにもかかわらず，ほとんどデータが無い，というような方言もあって，その差がおおきいということが懸念される。大量に記録を残した方言は，あるいは継承される（その可能性がよりおおきい）一方で，調査ができず，記録がすくない方言はわずかな痕跡をのこして，埋もれてしまうという危惧がある。研究者の数が足りず，そして，調査する時間が確保できず調査にいけないというだけでそういう状況になるのは避けたいものである。将来に禍根をのこさないように最善の方策をとる必要がある。

琉球方言研究は，1976年の上村幸雄の琉球大学赴任と沖縄言語研究センター創立を契機におおきくかわった。仕事のあり方が個々人による調査･研究から集団による記録･保存を中心とした仕事へとかわっただけでなく[13)]，音声の観察，文法研究のあり方などに

もあらわれている。

言語研究，記録・保存のいわゆる３点セットである，辞書，文法書，テキストという観点からみてみると，この30年間にも，長田須磨・須山名保子『奄美方言分類辞典上・下巻』(1977，1980)，仲宗根政善『沖縄今帰仁方言辞典』(1983)，生塩睦子『沖縄伊江島方言辞典』(1999) などが出版された。管見の限りでいうと，語彙集も岡村トヨ『金武ことば』(1994)，『いふぁくとぅば』(1993)，『せせらぎ――沖縄市登川の方言辞典』(1995)，池間苗『与那国ことば辞典』(1998)，宮城信八『シマフュトゥバ――大宜味村田嘉里の方言』(2000) などが出版されている。また，『八重山石垣方言辞典』『与論方言辞典』『渡名喜島方言辞典』『伊是名島方言辞典』『宮古伊良部島方言辞典』などの刊行が準備されているときく。３点セットのうち，辞書に関しては必ずしも満足とはいえないまでも，他の地域にくらべても，文法やテキストの作成状況にくらべてもある程度の数を出版しているといえるであろう。

しかし，テキストと文法書の作成は，まだまだ不十分である。とくに文法書の作成は，専門家のするべき重要な仕事であるが，大きくおくれている。琉球方言の継承には文法書の刊行はかかせない。しかも従来の形式主義的な文法論による記述ではなく，若い世代に利用してもらえるような文法の記述でなければならない。その点にかんしても光明がみえてきている。現代日本語の文法研究の進展があり，それを琉球方言の文法研究に応用した研究がでてきている。

注

1）そのことについては，上村幸雄 (1998) にくわしい。
2）そのことについては，島袋幸子 (2002) を参照。
3）沖縄言語研究センター (1979)「琉球列島の言語の研究 (10年計画) について」より。
4）動詞を調査するための調査票の作成も考慮されたが，実現していない。
5）沖縄言語研究センター (1993)『沖縄言語研究センター研究報告Ⅲ』『沖縄言語研究センター研究報告Ⅳ』『沖縄言語研究センター研究報告Ⅴ』にくわしい。
6）外間美奈子 (1993) にくわしい。
7）月野美奈子・島田優子 (1994) にくわしい。
8）島袋幸子 (1993) にくわしい。
9）須山名保子 (1993) にくわしい。
10）加治工真市 (1993) にくわしい。
11）『琉球の方言』(1975) 創刊号の「はじめに」から。
12）かりまた (2002) にくわしい。
13）かりまた (2001) を参照。

文　献

上村幸雄
1998 「仲宗根先生のこと」『追悼仲宗根政善』pp. 18-33, 沖縄言語研究センター。
沖縄県石川市教育委員会
1993 『いふぁくとぅば──沖縄県石川市伊波方言集』p.190。
沖縄言語研究センター
1979 「琉球列島の言語の研究（10年計画）について」『沖縄言語研究センター資料』17, p.12。
加治工真市
1993 「『八重山石垣方言辞典（仮称)』の音声化」『沖縄言語研究センター研究報告Ⅱ──琉球列島における音声の収集と研究』pp.35-36。
かりまたしげひさ
2001 「琉球語研究における研究者･話者･自治体」『第２回国際学術講演会「消滅に瀕した言語」予稿集』pp.56-64。
2002 「琉球班の研究状況」『第３回国際学術講演会「消滅に瀕した言語」予稿集』pp.90-97。
島袋幸子
1993 「『今帰仁方言辞典』の音声化」『沖縄言語研究センター研究報告Ⅱ──琉球列島における音声の収集と研究』p.18。
2002 「琉球方言研究の父･仲宗根政善」『国文学解釈と鑑賞』７月号, pp.180-186。
須山名保子
1993 「『奄美方言分類辞典』の音声化および奄美大島大和浜方言の音声資料の収集とテキスト化」『沖縄言語研究センター研究報告Ⅱ──琉球列島における音声の収集と研究』pp.13-17。
月野美奈子･島田優子
1993 「沖縄芝居脚本のテキスト化」『沖縄言語研究センター研究報告Ⅱ──琉球列島における音声の収集と研究』pp.37-52。
法政大学沖縄文化研究所
1975-2002 『琉球の方言』創刊号～26号。
外間美奈子
1993 「那覇方言の音声資料の収集とテキスト化──ことわざ･祈願（ウグヮン)･物売りの言葉など」『沖縄言語研究センター研究報告Ⅲ──那覇の方言　那覇市方言記録保存調査報告書Ⅰ』pp.16-168。